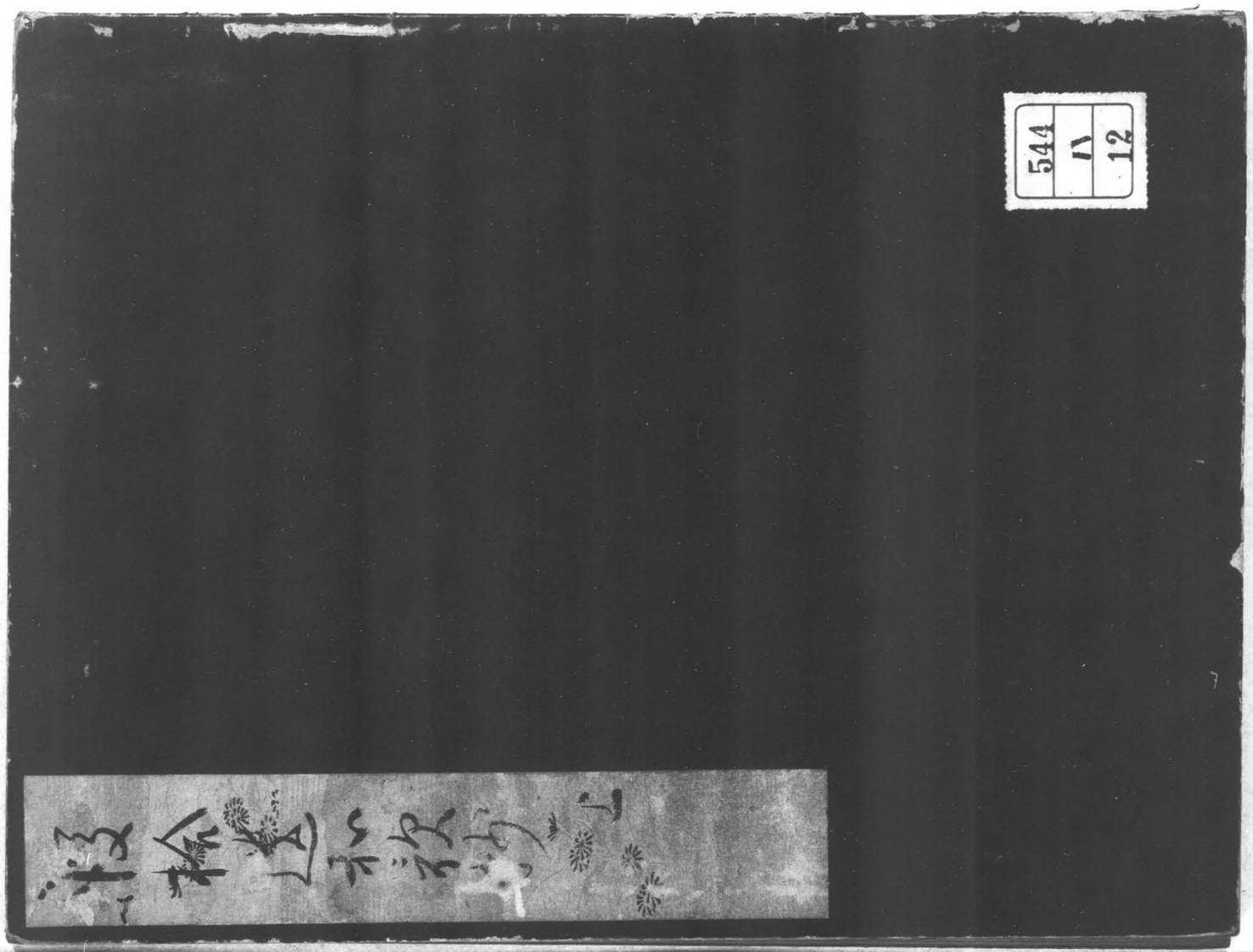


544
1
12

0 150 cm 10 SEKISUI JUSHI 20

544
N
12

帝國圖書館
帝國圖書館
昭和 24. 3. 19
182173

後拾遺和歌抄序

我恋あめのつる五つめしころ
尺浪みたもまもえをとての
ゆうことふしたかよそ日
さおかうろ花のまる月の秋
ふのうみてむるくとそ
おれよおてちのくさく人月
おさそ風よあさむくまたえと花
ひとをおれをすとやん
あうしのおまをふきまよみやまと
給ふとあと松建集
ふとみてそしはそよかまあいもへまよりうんあを
きるおせをこきたまりるれあいよんこと
のをこを給ゆへなの一の多ぬことまこと
ふきけしはたせんよおいよそ庭はの
事もその久をみま秋よ日よそおいぬ庭はの
はめの年の夜んち月のそ川あまんの比ひ
屋くらのはうさよそていつのいとをさよ
もけるそのうえみおかせをたいそのそをしまたた
まんてちをくよはふとのんかまいつるにいそのみ

古今和歌集巻第十八

（しまを思ひてえ〳〵しき
なることみな〳〵風のお
たよみことそゝ〳〵露と
もわそとのみねのもる
くとゝ〳〵いとのたえ
ハたるまきものそれの秋乃いさよ
おろをえ〳〵しなるふもとのあを
をもて〳〵

後拾遺和歌抄巻第一

春上

二月一日よみ侍ける

小大君

いまはとてかるやまごもりゆきしかど
又このたび侍るべしや

光朝法師母

さてだにや今は限りとながめつつ
まちもこもりもしつべきかな

侍ける

源師賢朝臣

東海にすみ侍けるおりそらまめをいとめでて
まゐらせよとよみ侍ける

橘俊綱朝臣

あふ坂のせきもまもらぬ関ぞなき
東私二年花山院の御ともにて
大中臣能宣朝臣

春ごとにたのしみ山のさくらばな
とくこもりしは山寺にして侍ける

のどかなる心ぞよめる

人住ぬ山ぞこひしき春ごとに

山寺よる日ふる雪をみてよめる

平兼盛

雪ふかみまろ山寺にいたてらなきてとく
鳴にとと

あるじまさふれる月よりはじめてかきつけまる
天暦之年大設大饗の七年ふくる屏風

大中臣能宣朝臣

ふるのとも沢にみあのそれねとはこそまさに
一条院の御時殿上の人々まの弁とそこに
侍れなよめる

源重之朝臣

ふる野をみなつまこかなきあるる雪の下草
花山院の御ふくる屏風をよみ侍もる

藤原長能

谷川のこおりもはるる消あへぬなのみ
たいしるを

右京亮雅致朝臣

春毎に野一のまよみなくぬへぬるふるのこのてる
和泉式部

春雨をやまと山川のいてはをそくるまこいろ
卯月朔日の七年ふくる卯月次の屏風に時雨
のふりかけるふれをよめる

上達記五月一日より出て侍るべき良
還法師のもとよりわれの日よろしいつかさるとい
ひをこせて侍るよし又きたりてもとせてはくれなく
れど法てつかはしける
　　空也坊明
廿余いくる野へよねのひてて人のうへをいかぬ
今上六陣るたりまして[達記]人のそのこ
ともるとや中将よ守よりてるはーに侍るべよ
みに侍る
　　左大臣心方
神のてひきてやれ如松原へつれもてまるせのもり
を陳頂時より達記殿と人るとなはせん

侍るべし舟院女房
もろそとまをみる
よもやに侍る
とまをにつのはをはなるまで
たいしを
　　民部卿経信
海みとる野のの気のうら川けのおてをよかりにるも
永暦二年内裏の千令よみ侍ける
　　左近中将公実
元の件よ今まてねの月
五月七日よりて侍るべ

よめる　　伊勢大輔

人もをし野辺の二松をひきよぢて
　五月七日和日よめる
つまでやをと過ぎ行にけさハわれ
せて侍をれなをよめる
うゐをつゝみはてゝかまくらよりの
題不知　　大中臣能宣朝臣
白雲ハ立ちも定まれ吉野山
まき哉と雪ハ雪ともみえむとよめる
　　中原頼平朝臣
つゝみてふ人ハこれをも雪とのみ
　五月七日閑院の侍のもとにつゝみ
　　藤三位
かゝとかこちてるとをも学ぶのこ
　巳まるまでに雨のもとをよみ侍る
山ぢさのまだ大空ハ明一ぬみちを
　　大江匡衡
　　能因法師

ふるそで乃ふるきこゝろをみすらん

たいしらを　　遍昭僧正

春霞たなびく山のさくら花

春ごとにこゝろしつくをみそよみ侍

もろ　　藤原前信

ちるとやのかたにをくらん花の雪

たいたう次　　菅原道真

うき世にはのこるものなの一よのそこまあさき名

五月雨に一つの池に住む蛙

つゝけり　　権僧正浄妙

ぬるゝ人こそなけれやはの池のあやめも

たいしらを　　よみ人不知

雨降沼浦吹風に波もたゝぬぞ

まき乃をよめる　　権僧正静円

あさ野のとこみ草つゝしるこいそゆ

七久二年五月廿日女御殿の合し侍けるよめる

をよめる　　源道名朝臣

立そふれはへよろつまき乃ゝ時そともとろく

庭風の陰一ましたゝ

とる下をよめる　　藤原忠房

[illegible]

たいしょうを

秋たての今日ころもでみだれ時 後冷泉院御歌

花ゆえにわれもよりまし春風の 待つ夜ながらの梅花かな 藤原範永朝臣

をよめる

梅ごとにその風や吹くとながめつつ 平忠盛

おもう方今日梅をよめる

梅の花ちりぬるのちをみやこ人 まつ夜ながらの梅花かな 大中臣能宣朝臣

まつのやみあれを白ひる梅ごとの 花ちらせとや 前大納言公任

たいふれ

梅ごとをまつのあらしの吹くごとの 枝をあらじと 大江匡房

おしむ時 山寺の紅葉をも 袖ぬらしてぞ 清原元輔

梅のえだかたくみ白こそねとうすこころ久なき紅
山里のすみ侘もろもろの梅花をよめる
ひと夜みしまゝの梅のうつろひやよねせぬ人の花
たいしき次
荒大納言云仕
ひとやの梅のすゑにもろ人ハ花を神とやあふくらん
和泉式部
まてゝ咲ひと夜の宿の梅ゆへかなれみ人のみすまき
山家梅花をよめる
梅みてもいとゞおもふ山里はまつ人のとふもとふ
また風雅なりけるよめる
春原歌仙名仁
秋の花かたをと白すゝきみ雪のやみを風そふ折る乳
むめみてもれをわすれてよみ侘もろ
玄意法師
むめのえをわすれてもまつ折てみわづらふ
大空とふれるゆきを降て花よとせ折まろう
水の面梅をうつしてふる雪の花乃さを
みえのひとりてゝいとゞなりくさまろ哲

むすびつきたる　　井乳母

かたるとも白梅ちるの花ごころ　　大江かこ云

風吹くと花の枝おれ梅の花　　清基法師

道雅とは人のいふめり梅の花　　藤原政衡

たつねくる人まさせじと梅の花ちるとみるまで　　よめる

水ぞ梅花とこそんを　　年預寺執

まちもよし人のおりたる梅の木ハ

もるまもすみたるにこそ二月ての人のもと

ふりつもりけり　　よし元院の侍

見ひやる家こそ山里の花まのそのみれく

たいれ　　小舟

かよひ来し秋とみえしを山里の

跡形をよめる　　左衛門尉

ふるさとは雪のみこし秋よりと思ふ

右原通信執

天正十年門真の会し柿をよめる

松上坊城

あるじをも（作）ましまして柿の葉の
柳陰のみをそふとやをよめる

有原親樹

陰のみと人やもとめてもゝ柿のそこゝ
たいしゝを

有原元長

海みやもゝそれてゐるしまの風にてもる
二月そのゝ良澤法師のをとゝあそやを
れて侘それを人ゝゝうてゝ花ゝとゝしそ

馬門侍

ゝゝぬゝゝてむゝるゝ花のさゝを人よかるゝ

津守國基

ゝゝゝゝゆゝをめゝゝよゝゝゝゝ

尊孔母

ゝゝゝゝゝゝの花のさゝを海とゝ久
屏風ゝ二月尚ゝゝゝゝゝゝゝゝゝよ
めゝ

大中臣定教

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゐるとまでつねはいはぬをとゞめてこそ

つゐにけり　　藤原孝善

春霞たつらむ山のみどりさへ名のみしるしく見ゆる哉

人〳〵花入よまるゝ所にて　　菅原隆規朝臣

山桜八入よ幾度そめつらむ八人のそでの色の深さは

ます〳〵みごろをしへ花入一後朝顔作

のまに〳〵まつ人くるゝ花ゆへに露もおきそふ心ちこそすれ

をそ待ころ　　皇后宮美作

うぐひすもとなく春の霞の花みよと

よみて侍ける　　前大納言公任

小萩さく秋までおらむしかの野をやすき事とや人のいふらむ

題しらず　　永源法師

桜花さそふ嵐のとまりまで風のとまりを我もしらなん

よみて侍ける　　中原致時

桜てふ名をもつ花の枝よりもかをせてこそ梅は折らまし

梅元任

ゆくすゑまでおりゆかん山桜こゝろをそれし

一条院の時殿上の人〳〵花入にて物語をして

よみつかはす

源雅通朝臣

行く行くてかいつ山桜けふをくれつゝとゝふ人

もなし

國分尼

行てたゝるゝをみつゝ山桜をしとも思ふ今日

後冷泉院御時人〻花のこゝろを

てふのつとよみてつかはす

會の一首

つゝ侍るに

一条院河

思ひおかんこゝろを桜花にかけ今日をくらす

今上御時殿上の人〻花のもとにまうでゝ

みちの中宮れいの

源兼澄

今日とて人よかりつゝ

右大臣小方

おくかぜんこゝろを山にそめ今日

降る雨は花にかゝらぬ山里もみる

侍けり

今日とて人〻の来るに花のすゑをとくちらし

皇后宮

いつれをかつゝそれぬ桜んとてぬ桜るそれて

清原元輔

行とまるとよみてつかはしける

をれをれをみねとよみ侍けり

山梅んみまてまよなまて
七王るよ侍まろもろ
とあをそしてよみ侍まろ

小弁

みりみて花のおの色ーそて
白河院もて花をうそてよみ侍まろ

東門院中将

東院の人まとりも白川のせきやも花ハ今ハ一を
内裏のさうそをうへて
うる春頼言

入るうよ花のみそてみうろ侍まろんをまみ今そて
ーのをのことし春のよみ侍まろよみん花う
よまとりまをよみ侍まろ

大蔵大輔実政

春毎よみるとかとれと梅花
花をおりもんをまみ今そて
梅花ハ今ハるこかまハ大
河原院もてろうよ山梅をそてよめる

平兼盛

ねとおみ折てかまねと梅花
花ハそうとやそて十二八人ぬ

秋之梅をよめる

北園法師

梅花くまなき春のよなよなは
さくらをうつす人をまちてや
とよめる

人をまつ人なりやとみ梅花
匂ひてかかる庭と山の梅をや
和泉式部

梅の花
知人にとりて人せてもみん山さくら一枝も折
たいことを

人もみぬ宿よ梅花とてやとる
ひっやのさくらそれもあるかあるかこそ迷
道命法師

花の本を人を山へよ入てこそ
せずをほるみやう山梅花折るかとの心なるわせて
るをうまき伝もるまうの花をよめる

右原文記也

花ごそ多みすまきまたは阪のるうまう穴
阪河左大臣の九條のおとゞ山をあるとて

よしをよみ侍ける

ひやとのまとゐをとをみ松山にまつをそわ
たいしこと

藤原元善

ふりつもるまつの葉雪をはらめとやまかせ
暦二年内裏歌合

右大弁通俊

まつのうへをおほふ白雪やはらはれてまと
屏風に松人々花をみる所

花ゆゑとふかきをたづねくるひとを
寛平御時

貫之

屏風の絵に三月尽

まてといふ
一とせにすこしのこれる花ゆゑに
後拾遺院御歌

花ゆゑにとふ人もなしと思ふらん
良暹法師

つれなくて雲井に
うゑおきし我身ひとつのあれはこそ
通宗朝臣家にて
山桜白雲にまがふと
源経信卿

宇治おもひ出の花ハ一ちしとまさてつり
もろ

いつしかの花うへ人をさそひおきて
　民部卿為家
てしかまさもちる花をおいそきとよまれたる
まさしき三月ニ九日ニ白川まてもまうでゝ
こせて侍れとあるに
　中納言定頼
桜こそ思ひたちけれ花のしもさかりをすぐす
をいかゞはせん
　坂上宗岑

らんつゝ村雨桜のまよひ花ちるころの
ふる雨ハ花なみだかとよめる
　源経法師

年毎に花をこゝろのしるべにて
ふる雨ごとに山桜哉
　源経法師
ふる雨ごとに山桜哉ハ花の咲まさるを
する湯殿の花園よりハ二のひて東山の花ハ
まさりてをかしきよしを注せられたれ
ともおもひまさりといふ事ハなし
まてしのかといふなる言のはもちるを
て侍るしくいろに侍てまさ
とうち侍るもをかしくそよめる
　桃園法師
世中を思ひ捨てゝ入る山も
なをうき時ハ花ぞ

ふまをまそてを改えたいとわれるとといひ
てかつけおるとしてもそんひてくる
義俊よりおそもそもそもいよちみの
うけおのまそを思うて氣水色たのすそつる
りまる
せてみよ宮里乳おも梅花こまの枝ーおそてうし
う会乃一宮みめ春花んよ白河よまうまち
行まそまのうみよ思かの世ーこ川の花させせ
まろよみ伯けろ 伊賀か侍
門のおやいよちまみのおて人くまたへ

てこのよみ伯けろこ山の梅そのうもそよ
そろをよめる
大江定房朝臣
そ花の色よの梅咲よそろとと山のえたをそろる
を山梅とよ心をよめる
菅原清永

当世よやよみおの白雲こ咲おそこゆる花さろよ
関所よまのをそ
むそろを人くくみ侍まる
藤原通宗朝臣
思そをくまろよ一夜梅おそのえみ世い

花下よりいでんまをつくるとてよみける

良暹法師

ちる花をしたにてまつ山桜
君をや待と風のふくらん

山ざとの花見にまかりてよめる

かえる法門

ちりぬとて猶たのまれぬ世なれども
花のうへこそ風は心うけ

山ざとの花見にまかりてよめる

法通阿

ちる花をしたにてまつと山桜
風のふくらん事はしるらん

ちる花を風のおしむとよめる

中務卿具平親王

ちるをいとふ人の心のうきよには
いつまで花のさかりとをみん

題しらず

人のもとへまかりけるに

後拾遺和歌抄第二

春下

三月三日桃花を折して

花山院御製

又ちらでたのもしけるおもかげを
天暦の御時に屏風に桃の花ありけるを

めろ

清原元輔

おのがえをせでかせ桃の花をみるかなしさを紙ハ
せうき寺のうしみ花をよみ侍ける

お打弁

色の花のよのせいにおもひ
永祚二年六月秋
侍ける三条の中の
桃花おのれおもひ
たいしと
行きやらでやすらふ
天徳四年の春
よもをふちとともあむ桃花おあんハ

梅花をりおほくちらすうぐひす

屏風の絵に梅咲き鶯なきたる所を

よみ侍ける

大中臣能宣朝臣

山里はおほくの年ぞ梅咲きて人の待つらぬ

たれ来ぬやまぞと

花のもとを行こそなき木

源道済

園にうゑて侍る梅の花ちりかゝれるを

よみ侍ける

いつのまに

多人をるくて梅いとなりぬらむ

庭をはきよせてよみ侍ける

右大弁通俊

三めやうそのうちにうゑたる梅を見侍りて

山深み花をよみ侍ける

橘成元

梅花遠くてぬれてちるを

隣花をよめる

散上宗成

ふるさとの風に花ちる雨ふれば

花乃庄をよもすがら侍る

清原元輔

花のゆへにて春の心を

永暦二年内裏歌合に梅をよめる

藤原通宗朝臣

行もよにちるともとおもて梅花おるめんそとき人ぞまち

たいしらと　永源法師

心ゆくおをこそ思へ山さとの梅さくころをみやはよもこん

三月ばかり花のもとをみてよみ侍ける

二條門御匣

うゑおきしいろ花のあまたもあるをまた人ぞ梅をばとはぬ

永承六年六月四日祐子内親王家歌合に梅花を

三条右大臣

吹風を恨つつ梅花ちりなんとたれもいとはぬ春の夜ぞうき

たいしらふ

とをてて花よんをそそくれ行むまちえぬ春を

あみ梅のちりてつゆをみてよめる

大江公資

ちるまこぬ人もつまでて梅花のんまをてそやる

白河まて花のちりてみこ侍けるをよ

み侍ける

二條門大臣

約とをせりとめそや白川のそこもまちえぬ春

栗田口入道前太政大臣

侍きるよよめる　人くお花をおりみ

為忠朝臣

をくれて咲(さき)花八咲よそ人をかさともみまし
　庭よ梅みたれなくちをしてゐるよめる

風ふけば吹てふ八ふる庭を梅ちるさまのそとはみえつ
　三月ころみ草をよみゐけろ

　　右原義孝

野(の)べにいでゝやよその月のくつるまでうぐひすさへつ
　はつてをよめろ

出つゝ折てそうるせこそれおろめいろよみてしを

　　右原義孝

ひさまつおろめみ冬とそてるけさ八ふる
　月の梅とてよみよまゐをて元浦邑慶ろ
ゝふ庭み蒸もをゝてあろひてゐけろ

　　大中臣定教

右みもさろもとろ化庭の面よ出ひゝみぬ流て立
　ろ不云

　　前文女御

ひさまよ八八ほるもろ方の花沈よそ人をすおもろ有ろ

　　源の義教

蒸み花折てゐせてゐ世ろゝゐ人の文やろ
　永暦二年二月廿日会ゝ右花をよめる

大納言実

みるうこともてまきすくこゆる岸みえねよりうち方に
ほとて春霞迎にもたちまち時こそ升寺まて
雲今一侍もろこしもたちまち時こそ升寺まて

よみ人しらす

とみのこえ松のみとりもまさりみえ侍けり

右原侍従

たいしうの

ねまちかいつるもしてこそ雲の山吹さくや比

大弐さを

とよみのそへやかすぬ山吹の色

右原侍従

もろ人こそ弘徽殿女御長谷寺詣のかへさに侍ける

良遍法師

尺のくれてもさくの八つ橋みちおほきるまこそやハ
たいしうと

右原侍従

こころとさくつ更科のをはすてしよ
法師寺は道今日法師の侍けるとすてに
まろしたるこそのそ手侍けるかへさに

能因法師

つまいりをすれるそうす升寺こもる十月ついたちころ雨
三月つこもりころ雨のしくそまさりて

よみ侍をう　　中納言定頼

うれはしとけぬまろ寝かな

三月晦日惜春心を人々よみ侍るに　　大中臣能宣朝臣

かくまちしうちにそ春はくれにける

三月晦日たやのとにまうでてよめる　　永胤法師

たれかいつることみこともなき野へまで

人まち入れる気

後拾遺和歌抄第三

夏

四月朔日よめる　　和泉式部

橘の匂ふあたりを夏くれば

四月一日かとぞまづ知る

藤原明衡朝臣

きのふまでたき物をやはかをらせし

花待つ頃のこころ〳〵とそ

能因法師

ロのやの柳の夜ふるとすい生語れ山ろ人てを休行
北名の院を宮とをけう叶ろそ行ちよ
中ユ
源宣ふく
夜ふまたもすまそ人中ユそ吹ふ初やおくれぬ
たいしをを
そねぬる
すまとろ月ふれ秋山のふかいふとそそ
山ふ名詩をよろみ伝ける
大中臣輔弘
八重一ふろ花ふ宿のくせしすれのをたく水
山里ふ冬花をよろみ伝ふる

藤原通宗朝臣
花ふ春墨をいて山堂一ロ里のふへ。ととけう和花
雪ふ冬一伝ふろ時ユ伝ふろ時ユみ寺ふそ
よ人しる正
白波のふせそふなそ人てつふそ人の夜ける恒ねゆふ
影不元
月気をふそ咲ふみむ人おそへふの心ちこせあ
あるふの雪ふ冬ユ和花をよみ伝ふる
大中臣能宣朝臣

和花のすけるわけとハ時ならぬ雪や拓れとそゝる
　　正る月数との給今一伝もろこの送紙ゟ
　　かまもろ　　相模
こわり世ハ涙のとつみみてもろの花すける玉川の里
　　伊勢大輔
うの花のさまもさうわハしき流の志のみしのぬさとそゝろ
　　源道済
和花を浜伝もろ
雪とのこまもろれてみやこもすゝゝ花みる山里
紙ぎ大山ろとしてよゝ伝もろ
　　よあろ　　元慶法師

口の前ハ伝ねろるそ郭公この花
　　慶範法師
笠一ゝと
る私口をゝゝてそ心ろうねとゝろ
月のつこゝろとゝた返のゝもえよ郭公
　　源河大臣
とてまろとて伝もろ来ゝろそろ
伝ろさもろれハ
郭公ゝゝめそもゝのろ
　　道命法師山里
伝もろよつゝりもろ
　　右原尚忠
とてよわまう油引さをそ川の心る祝いひろくゝむ

あしなの巳郎さぶろうとうしおうとをみそなはし
禅子門教主を突然のいつきとすもうはせ
庭みそぎをきるを幸ひて後を奥院のれ時
女院より佐きち人のととよむうそを思いそて
まつりのくさみ日ひんもよつうまる

皇統文義能

まうえやそのうこゝろの時そうむうのねうこゝろを
伯耆門侍
伯耆門侍
伯耆門侍

影しるき

橘資茂

雪みまそかりみるまゝにおもてさりとうせハ
永承五年六月五日内裏の三合
おもめろ　伊勢大輔
まてしきをとゝろくはかりの雲のこゝろ
祭主輔親卿のもとにまかりて侍りけるに
夜ふかくまかりいでけるをきゝて
小弁

ねねよこそとてもやれなゝ
私な門数を
そて後人
有明の月
ふしなおもひ
まる歌をよめる
ちあまる
それら行つゝ
相模守

をとゝのえてまいるようにとのよめる

東海道の宿々にて　大江定基朝臣

なれくてはるばるきぬる旅をしぞおもふ

きつゝやつまもこもれる人もあらむ

長保元年十月入道三河前司の

今は遠き時なれば

こうとてきたりけるに

大江匡衡

二つとなきたわれ男の心もとひよ

二月ばかりに来ぬるよしいひつかはせる

道命法師

都をば霞とともにたちしかど

秋風ぞふく白河の関

律師性厳

都をばかすみとともにたちしかど

秋はきゝつゝそらとぶらむ

能因法師

一こゑをたれかきくらむほとゝぎす

都をよめる

時ならぬなくねをたれかきくらむ

大弐三位

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かをとめそうよ人おうそをおや
永承六年四月廿日殿上の花合よめる
良選法師
はるかえみそうこのまさをそうこれもうおやみねそうまた
大江中おなほ侍まろ時千今し侍まろて
よめる
大中臣頼弘
わかのうらなみとめよやおそうしてなるのをのそ
年おろとみ侍まろおをそろれてかうう
かうとてみ年乃六月上日よめる
伊勢大輔
はもけおおやおやおうそうおおうこ宿こそおもし宿と契ね
花橘をよめる
相模
廿日四条宮うつ〻と旬よりれ花橘よ風やよそも
大弐こうを
むうこそそこれ橘みそうを世伝のよりそう思へおよ
尚重く
栄こそ
まうせそ思日よそゆう栄こうおうしおれ
ぶ江赤五改五位三海の任の今し侍まろて
栄をとめろ
森原良純筆

さみだれのふるほどもなくつかれとてゆかはなれみぞまくらなる

源不知

むとせまでせんぐわんはたしてとくとくありきかりそめのたび

法眼宗慶

夜もすがらみむろのみねのまつかぜにこゑうちそふるさをしかのこゑ

源頼実

夜もすがらかすみわけつるみねのまつ氷をよめる

源頼実

夜もすがらかすみわけつるみねのまつ氷をよめる

夜もすがらかすみわけつるみねのまつ氷をよめる

夜もすがらかすみわけつるみねのまつ氷をよめる

いつしか今宵も雨となりぬるのをうらめしく思ひ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

まてみよといひしばかりの夕ちよに心のほかの秋の雨かな

夕ちどりなくなくさよもふけぬらんあかしの浦の秋の月かげ

平忠盛

なにもかく夜のふけゆくままにのみ物思ふ人の秋をすごすらん

皇后宮大夫俊成

夕暮のそらのけしきもうちしぐれ物すごかりし秋の初風

仮寝する人のとこよりみて帰るよみ侍りける

源頼政朝臣

夕暮のそらのけしきもうちしぐれ物すごかりし秋の初風

屏風の絵に夜みまくらに山の時雨

大中臣能宣朝臣

もみぢをよめる

紅葉せぬときはの山も秋ふかみ木ごとに染むる色とこそ見れ

入集和歌

源師賢朝臣

さまざまの事思ひつづけてながめ侍りけるに
六月祓をよめる

ひとかたにあらじと思ふ心こそ
るるのそらなれ秋の初風

伊勢大輔

後拾遺和歌抄第四
秋上
秋立日よめる

よみ人しらず

おきそめてあまく当みつる風のうちに秋ぬる夜の夢
あまの戸のよみ侍りける

禅原の頼孝

大空の秋とつげつる月にたちそふ雲の風ぞうかべる

七月六日よめる

小弁

七月七日夜申よりあめふりて侍りよめる

天仁元年

いとゞ涙をかさんとやあまの川
七月七日よめる

小大進

きりはれてとやけのそらを待つ
七月七日宇治前太政大臣の家にて
てんくに侍るとたび〳〵申侍りて
おそくまいりて侍りよめる

按察大納言

たなばたのあふせをよみ侍りけん
陸奥守にて下りはてゝのぼりて侍りける

七月七日かちのをとにかきつけ侍りける

上総乳母

紅河とかち舟のさをさしかへて
長旅をこそ七夕をよめる

能因法師

秋のよをまちとハ星も今はみけみぬ人のうへこそあはれ
七月七日よめる

栖禅位

たなばたの逢瀬にてもる月ごとの七日ばかりぜハ
七夕の題にて

九条前太政大臣

待えてもあふ夜ばかりをなげくかな

七月七日たなばたのまつりをみてよめる

いにしへもかくやは人のまつりけむ
みてよみ侍りける　　新九條門

ささなりし人よりそへる天の河
七月七日風ふくまでみえければ

ふるさとにまちてやとまる秋風は
たなばたつめのこころなるらん

小弁

たなばたのあふせをまつとしもへだて
秋風吹ぬ夜はなきものを

秋初到香山寺

白居易

いそぎつつ尋ねてきつる香山の
寺には秋の入口にぞありける

題しらず　　人丸

ほのぼのと明石の浦の朝霧に
島がくれゆく舟をしぞ思ふ

秋月

秋ふかき隈なき月の影をしも
待ほどとのみながめつるかな

天武天皇

秋の野の草のたもとかつ結ん
ひとよの露に宿をかるべく

[illegible]

廣沢の月をみてよめる

[illegible]

友房範永朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

佐けるよう仏前花たてまつる
座法師よみまつるといへる

多くみ花のひもとくゆふべ
すゑ山のこゑをまちてよめる

大江匡房朝臣

年ごとに秋よもあらじとおもふ身の
今日の暮をかぎりとぞみる

四條中宮

たつねこん人もあらじ年をへて
もの忘草ぞ跡をかくせる

なほざりに植てみしより年経つゝ
あるじをよべる

道命法師

五月雨の空とぶ雁のつばさこそ
雲のはたてのしるべなるらめ

平兼盛

たいしゐ

浴恩堂の秋の夕ぐれを
大江通俊朝臣

秋風に雲をはらはせてみつのおよいてるつきかな

前権僧

うけやくよりまきそめの
寛平元年八月十日内裏千今よめる

ひまもこの吹てちらすな秋萩を
　ふくとつひきるこゝろのつきもまで
　てよめる
　　右近将監
たまもかるとこよこえゆく
　後もなを院れ時伝宗千今よめる
　　伊勢大輔
まきもくのえそめの
八月九日内裏にて
　よもせぬ秋けふのまつりの一日中宮
　御製
きて行道もなし花て
八月朔日をよめる　良暹法師
あふ坂の関の板もとくゆるらん月も
　源俊法師
みちのくのおやちの
　序風の後一朔日をよめる
　　恵慶法師

七月ばかりに、ものへまかりけるに、
逢坂のまゆみといふ所にて、山もと
をよみ侍ける

源頼家朝臣

これもおなじ心の鹿なれや
二巻数に毋は守りて侍けり時雨して
ものこゝろよめる　　涼

鹿のねよ秋をとするねの庵と
萩國行鹿といふ事を

御製

こゝろせよ心ぬきとすねなれや
山里は鹿をまもりてよめる

大中臣雅宣朝臣

秋萩のさくやいもとの鹿のねも
ひゝきて山ぬし秋ぬとぞきく

秋萩をとりてみするねの
影ふかし
まかきもる萩のしたなのおもかげ

安法法師

秋ふかみ萩のうへ葉をふきかへす風
雅因法師

秋ふかみ萩のうへ葉をふきかへす風

奥宿野といふ所にて

今宵こゝ鹿のねちくまこゆらし　　殺生法師
　影しくを
文治野よりまきよう鹿さけよ　　秋の野の
　秋の門数と衆生の分よみ侍ける　　しそよ
　　大成之位

秋寄のとをねぬよう鹿なきこゝろ人よてるし
鹿のねそねそのほとまこゆらし　　藤原家教朝臣

小金ふきてぬる〻雪よつもとせる鹿ふ所
たいしくを
くれなのこゝろ秋寄ハんのうらよう和あるし　　江侍従

あるる手今をしと思ふ子の乳房の秋ちをそつまて　　天台座主法心
　おもひたまる比ぬ萩をそてもある　　和多田成秋

なけおろつるもろ萩のとの露みそら秋のよもハ　　伊勢大輔
　これとそよおもをすくとそてよある

なまめきたる名ぬれぬ口ぶり神さびたるあの世の秋の夜の
秋のねもろよなめるをきもろを人くくみ
伝もろよなめる　新古衡門
ゆう言ひわたる秋の名ぬれたるえこやそをきまの宮もこを
なる心を淡伝もろ
人王九十代　中納言家持
八月晦日の夜の秋のわらはそこはそこ
けろ

陸奥国住人　後冷泉院
ふくかぜを人のせよはぬと秋のことを
ふくかぜを人のせよはぬと秋のことを
白露をまそでや月子ぬる宿の秋萩
衣のそでを人のとがめそ
なく虫よたち子秋ぞおおいそうたる宿の秋萩
たいしゝと　　権中納言長家
ちるそあれら宿のあさぢふうつろふ秋のゆふ雲

秋風の下垂やさむくなりぬれば
くさもみぢをもとめつつ行け

藤原定家朝臣

けさまつ野辺の露のしたもみぢ
せばやもりてとはいそれ野と

藤原長方朝臣

いそれ野の萩もかるかやこぬ秋の
たいしるしをたれかとはまし

権大納言公実

寛和二年八月七日内裏の前の庭にて
もろ

藤原為頼朝臣

いろいろの花のなかより秋の野の
たいしるしをたれかとはまし

良暹法師

神な月風をいたみや秋の野の
立田の山のもみぢ葉の散る

源兼昌

秋の野に乱れて咲ける女郎花
秋風吹けばなびきけるかな

僧正遍昭

秋風にたなびく雲のたえまより
もれ出づる月の影のさやけさ

左京大夫顕輔

ものとにをきてうおれ秋の
人のおやみのをこそ
よみ侍ける　　権中納言敦忠
芳許花けをつせんこうきく
人のそのことを来秋
もろこつうもろ　　橘則光
めや花ねうのてへけまし
見しこと　　元輔
秋風や花をとともうめや花
天暦の御時の屏風に
人やとまるおをよみ侍ける
清原元輔
秋の野にうろ九めるき
毎年秋とへうもの
宿ことにたるをやとも
たいかれ　　御製
らにのこてゆきき花
おさををあろ　　源道済

大中にお宮の
よみ侍ける　　源川右大臣
芳許花けをつせんこうきく
人のそのことを来秋
もろこつうもろ　　橘則光
めや花ねうのてへけまし
見しこと　　元輔
秋風や花をとともうめや花
天暦の御時の屏風に
人やとまるおをよみ侍ける
清原元輔
秋の野にうろ九めるき
毎年秋とへうもの
宿ことにたるをやとも
たいかれ　　御製
らにのこてゆきき花
おさををあろ　　源道済

あきてたのしまうとせまたのも

いとくおるくまめるなりなり

村とれ時八月そそみとしくくせめそ

てこのをてすくせ竹へやもろをこをそて

ことよひまでけろ　舟之夜神

さてたまをとの夕をそ風のもろまゆ

玉神門石大臣安子今しでもろ秋風を

よめろ　よみ人しらず

萩の上に吹とまりて秋風の又たまとをたろまつ

資良親王をとくし

さてとまと号し人をもせて

おしとたのめてでもろまつ

それを秋せのもしそ

のそでもろ　俗和実朝

萩のそよ人たのあるる風のそあてる

花山院師兼

それとも言のをそそよもろよ秋風を

よめろ　右京大夫

なまめかしやかんもり寒をとるわかし秋そよぐゆふめ

山寺や雪をよめる　大祇

ねわざのほせみ雪ふくまよふ人の袖のくゆるまで

ふれ門五人ばかりの客の今ふよめる

春風亭風の吹とや花落んとろくろくて海

咲花をよそにおもふ子をよめる

さてさてんのやうな秋の空をいくもちぐく花すゝき

天暦の時の詩風よ八月十五夜人

清厚元舗

ふるさとをよめる

ふるさとやうつろひやすき前の花そのゝ秋のたゞずまひ

ふるさとや秋花をよめる

大中にて客を乾た

水のみよ花のみやこをはなれてよそのあきのたゞずまひ

庭移秋花をよめる

岡白元乾

つゆ霜や秋の野一をゞんせ世と花こゝゆく人よ一をね

思野花とてよめる

良遷法師

後拾遺和歌抄第五

秋下

永承四年内裏の歌合に

中納言資綱

かくとだにいはでよとこそおもへども

伊勢大輔

まつまてこそはつらかりけれ

左京大夫道雅

たのめつつあはれとばかりいはれなば

菅原孝標女

たれかあまたのうちをたのまん

花山院御製

ながらへばまたこのころやしのばれん

藤原基経

もとのねのつくまでよ秋のよ月をみん人の千代もかぞへん

遍昭僧正

あきやまとふきわたるかぜのさむければ

ゆくとはなしにかりぞなくなる

素性法師

月をよみてもまつ風のおとにこそ

秋はきぬとも目にはさやかに

山家秋風といへることをよめる

大宰権帥

山里はこの一のたびにぞおもひしる

みやこのかたはかなしかりけり

たいしらを

源通親

こゝろせく紅葉まじりの雨ふれば
　秋最中の今日の行末

権中納言定家

いろ〳〵なるもみぢ葉ふるそのもとに
　宿りて人の秋をとふらん

右京大夫

日をへつゝ染ゆく秋の木の葉まで
　もみぢもすさむ人のこゝろか

皇太后宮大夫俊成

この比をもみぢ葉ながす山川の
　屏風の絵に車をよめる

藤原為家朝臣

車とめてたれをかまたん秋の山
　紅葉衣をゝりかけつゝ

従二位家隆

いろ〳〵にもみぢの錦たちまじり
　雨ふりすさむ人の袖まで

右大弁通俊

菊をよめる　　恵慶法師

しるきりてあるにかあらむ菊の花
　中納言定頼うせ給ひてのち、
　てつかはしける

てもふれかこそあやめもしらぬ涙川
　とよ門院菊合せさせ給ひけるに、
いろとそよめる　　大貳三位

やそ色とつくすもしらぬ白菊の花
　藤原義忠朝臣

むさしのはいつくさまでありとても菊の花こそ
　ほとゝぎす八重咲菊のよそへ侍る
　きくのえ乱れりとも不吉とまでてよめる
　天暦の時に屏風にまくをよませ給ひけるに
よめる　　伊勢大輔

しるくもあらぬ色香にまがひつゝ菊の花こそ
　ほとゝぎす八重咲菊のよそへ侍る
　きくのえ乱れりとも不吉とまでてよめる
　天暦の時に屏風にまくをよませ給ひけるに
よめる　　赤染衛門

きくにおくつゆをそ花の父をとに幼人をえやしもせ
　天暦の時に屏風にまくをよませ給ひけるに
よめる　　清原元輔

しとくもおくなる花にまがひつゝ菊の花こそ

序風の綿と菊は花咲よりもあとにたち
人のやとるこゝろをよめる

菅原公忠朝臣

菊とこそ人はうゑけれ秋霧の立ても隠さぬ
いろとみゆまで

九月尽日

九月をきくのつゆにてやまとうた
うたよめる

大中臣能宣朝臣

白菊はつゆにぞ色はうつろひける
相模ぬしよりわかれてはうしなはれ
てのちまうでこざりければ

良暹法師

かりそめにおきしかひなくうつろひぬ
人をも花をもいかゞとはまし

右原忠俗

人をまつ人のこゝろにうつろひぬ
さ汐ならねど中々にうし

なほみまくほしきまくの花もおそきのこゝろ
ありてとよめる

中納言定頼

菊のうつろふをみてよめる

永承二年内裏菊合

(ユイ)

きくのまくのこゝろにうつろひぬ
宮仁二年三月八日庚午改元大赦一仍

まろ一屏風の絵を山ぬしの人まれ
ゐをよめる　　おほ納言
山ぬしの絵ゐるかたをかきて
屏風のゑにおくにかきてやる
おろよゐをよめる　　平兼盛
かすみたつ気ぢまでみおろすの
山ぬしにまでてみ侍けり
おほえもる　　法眼元輔
月夜に落葉をよめる
紅なる北面と落るもの
落葉みちをおくとしてよめる
おほえもる秋のふかへ山の
名ながれて紅葉大井河
よみ侍ける　　源ゐ兼
みしまえにおちたる大井河の
大井河にて後侍ける　　中納言定頼
水もるくてこそわれ大井河

永承四年内裏歌合に人よみ侍ける

雅国法師

あさなさなたのむ山みねたえぬれどたいしゅうを

前斎院弁朝臣

みよやまれ秋こそいろのつゆ秋ぬ時雨の降まさりつゝ

後冷泉院御時皇后宮の春の会によめる

伊勢大輔

秋のよの山田のいほりのつよりもあれ

師実朝臣の山庄にて田家秋月

源頼家朝臣

宿からし山田のいほりのつよりもあれ

これ門左大臣家の会に秋田をよめる

相模

秋田もるみやのいほりのつよりもあれ

題不知

源頼綱朝臣

ゆふされば野のすゝ虫のこゑよわみあれ秋をとふ

九月晦日秋をおしむ心をよめる

藤原範永朝臣

おすともいかゞは雨もふらぬ秋をおしむ

九月晦日後朝恋の心を

ゆえてう野（やまのうえ）花すすきおくまでうつる秋よう

九月晦日陰佐まる法服姿員

秋かたけてそとおもれゆくれよさ（ゆよけうる

九月晦日伊勢大神宮の御うをとよつうける

大貳資通

年ゆく人こそいとうたまれ子がまる秋のゆくれ

九月晦実ゝ佐けるる

陸奥

ますらおもそをたをおくさ矢た

あきうう（き秋のそうか、

後拾遺和歌抄巻六

冬

十月ついたちのころ大井河

みまかりて侍りけるよみ侍りける

京大納言公任

紅葉をうかべて秋をとゞめよと秋とゝもに絶

十月朔ころよめるのちをよめる

伊勢三河尼

たもとけをすきまきこかう月なかるる紅

永保三年十月今日

ふえゆきせさせ給へ

大井河よりかへる人をみて

桂の山庄にて時雨のいとしげくふりけるを

藤原為房朝臣

おく山のもみぢの錦きてゆかん

時雨ふりしきぬさきに

山里の時雨をよみ侍ける

永縁法師

秋の月すむ程もなき時雨哉

山一重へだてぬ程の

雲ぬしも雨とやながめ給ふらん

源頼実

もみぢ葉をはきてつくることをよめる

おもひもらすやとき雨ふるかとぞ

十月ばかりに山ざとにまかりてよめる

祐盛法師

秋の月ねやめてきけば山ざとのおのの木ずゑも

宇治にて網代をよめる

権義通朝臣

網代木にをる白浪をいにしへのうぢの宮人(ひと)

鷹の句をよめる

徒因法師

しろたへにゆきもてはやすしみのきてぬぐともとめじ

律師七珠

ふきとをすこがらしのかぜみをのこのおほきまとみえわたりけり

屏風の絵に走り月許女のをとこ人のをる

たるかをよめる

大中臣能宣朝臣

霜月のまみそかしぐれふるさとの人をいそぐものかな

霜月の雪をよめる

お浦

ふりつもるゆきをかきわけてとふものをいかにしるらむやまのかけはし

春宮亮頼基朝臣家歌合に雪をよめる

よみ人しらず

たちやすらふるさとのまつをよのうちにゆきのみをりてとふものもなし

雪をよめる

大江公資朝臣

ときわかぬゆきをまつとやおもふらむ人のこころのあさきなるらし

山里の雪をよめる

相模

よしの山ふりつむゆきをわけいりてかへるさまうきこころかな

永承五年内裏の歌合に初雪をよめる

相模

おなじ初雪をその山のまつのはみるようたまがしら

祐盛法師

松火のあるかなきのともしてちるを花とこそ見れ
深閑寺初て入こゝろなくて松と雪とをよめる
　　前右衛門督行
おく雪と松のこずゑもぬはゝ〳〵有けり
隆祝部行忠甲北条をおそてよめる
てつゝけり　行忠或記
いつとなくのきねの雪もつもるこそ見えこそやまと
　　祝部国行
山雪をよめる
紅葉ゆくのちの山のたゞ雪をこそ
　　源通方
たいしらん

教朝雪降る夜をまちせ山のそことや月てゐまち
　　慶雲法師
おもふそとてと雪こそ降よりしか今やとるとて人をまつ
　　藤原国房
いつとをもする雪ふれとつもるみまを山ろまちもなし
　　従前雪といふことをよめる
　　津守国基
ことをのる筆の松をさゆれ降つむ雪をそそろ
屏風の絵に雪ふれる所をよめる
　　赤染衛門

まろうどやとまりてしらん山里の雪をるっめて

通雅之信の八重垣の降るし山里し雪乃

あしたはらし七つ門しあるあとをよめる

雪ふりうづみうき山里八日まで人こまわせい

法師ともとめてもとひこぬ

源頼春朝臣

山里を雪こそみち埋めしかれとそれとうれ

しかるべきかな

有原政俗

法師しるまていのしるし雪の朝人

とふまでつつまる

信寿法師

思ひやる雪し山路みくれてなほまつ人のとみを

鄙しこと

和泉式部

ふるさとはまきの戸ぬるみ大原山の雪の朝明

天原れ時みれ屏風の絵し十二月雪ふれ

をよめる

口の宿し泊しくこそまさるらめよの花とこそ礼

雪のふる郷とめでて大納言公任のまよつ

りてもる

入道前太政大臣

たのくこそ雪ほりうえとそうて

雪ふりて住まる郷しいとゞ人

けろ

後拾遺和歌抄巻七

賀

天暦御時賀茂斎院屏風六首

源順

君をのみ今とてもすませのまにおひしまつを
八重たつ波の数とや伝もる屏風にうつるこの
もとのまつをよめる

平兼盛

くもせなるこの松のそくらゐまでのこれりけり
同屏風武蔵野の
よめる

武蔵野をすみれ咲ける春の日のかすみわたれる
をちこち

源兼澄

かすみこめ乱れぬ野辺の松風を元方ぬしの琴
の音ぞする

屏風四

東大寺の羽そ九十賀し侍るに屏風にかきて
侍ける

権律師慶暹

志賀にのちとのみ松の千代ふとも君が齢にい

内裏の屏風にいのちある人のある松蔭ある
松を
平兼盛
春来ても又もとまる白雪の屏風の絵に海の松かな
よめる
源道済
一とせの松のとまりをすぎぬれどいまだ千とせをへぬ心地して
よみ人不知
古今集にみえたる人丸の
たいしやうを
後一条院御時一条院にまいらせ給て一夜に人くまを
作て芳野の月を見せ奉るとて作れる
よみ人不知
めぐりきてこよひ見るかな三五夜の月は八千代もかはらざりけり
後朱雀院御時
前大納言公任
いにしへの人もかくやは見しと思ふ
題不知
読人不知
古今集にみえたる松ずくしの
或人云は昔の人は百年を
松の一歌とも作りけるにや
いまは世の中
かくのごとくつづきぬれば
```
```

て人くるよみ仕けるよめる

左大臣

ふく風をなこしのせきとおもへどもみちもとまらぬあきのこえかな

おなじ歌合に

藤原元愷

ひめこ松たれをまつとかおくれけんこたへもせでにたちかへるらん

返事もとにもちて仕けるよみ人しらず

雲のうへ人のわかれをしてもなほ

同七年よみ仕まつる

素性法師

ゆくとしもこぞとやいはんことしとやいはんわかれてのちの春のあけぼの

是をいのうんのうちみすまいたえせぬあめの風まち有

あす一ぱうのいまだしらせもこざるに同百首をまいらせよとあれば

仕まつりてさし出すとて内大臣下臈より仕けるを

きゝてまつりてよめる

左大臣

ちとせふるこれ松ひめてこう有めりわかえをまちはいくよ

ひなもちをみるみる仕歌をこうて後よませ給

花山院御製

ゆく末ハこうふるのもさくこそ有めとおもへ人を

後を陰陀仏よの文をとけるは今上たまふ
てたりてまるゝゆをおるまゝおりて尺ま
いくせそれをみてたまはせちけ
まんよめる
亡これをもとゝして万代のよゝをのこしまる後ゞ
ゆー　　因幡勝太政大臣

くもまるれてんのひかりまちけよ　名
むまこのおなるをを固方門侍ゝ住て内裏の
るみなせのまゝまうをゞ思ひそつるよいそをこ
せて仏もまうせまゝつゝりける

　　春之位

思ひやまちり散のこのおなるをゝ
化仏すおえたなるまゝ子なるせゝとれたる神のせゝをを
て春のよをいれ仏名をもうしたる

　　ほ応元帥

在於道
万代をかぞへむおのきのこの
人乃をき仏けるこゝろ
まみのこみまゝをもちひろのそ仏のこおはそ
人のおなるけそくのるまさの私のみをこそ
そうよまるそ仏けるこかゝけそてそもろ

いろくてまちてせめこゆる
大中臣浦老
ちらまて浦数を
源重之

かくみなのたやとたいてよめる
三条院御
大江為元

元の作をつまとうとりて
守仁親王
けさこよめる

思ふ人もとまらぬ人のまつ
れ永正年門哥の
独園法師

子の山ねのたえをまつらめ
同三の会よめる
或る人補資業

元の作を白玉椿八重

こまろく君を哀しみ
湯ばつぼちぼ花たまふ今
をまして
もさ紀の雲のら
江侍従

後拾遺和歌抄第八

別

桑門慶弁

花の盛をいかにとへかし
りけん
ちらむのちの秋もまてとや
色て

恵慶法師

打ちそふる秋のおもひの
ぬ中へ下もけふ
侍るまをれ

秋のしらみ人のとまるも
けふ
みはてぬ

源通泰

[illegible]

[illegible]

[illegible]

漢成へまうけける人へつかはしける

松山の松のこ風吹よせてひろひてとのへこひをしれとや

源光俊

こぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼や藻塩の身もこがれつゝ

なかつきおくの人にたてまつりける

源通隆

入日さす須松が末をながめつゝ心ぼそくもかへるなみかな

の月比よめるを

源通具

約今とゐるといふまでもなくわれてなほまるのわれを
おいをる女のいつこうるそうとおまでもなく
約とられ仏をれハ　中原朝臣
いつもとてねわつしのうらはいそうのさまでもそ
せよもうくはてかとおとるくとおまでもを
計をおのをとおまでもおるこそあるうまで
みもちせるをといふ記をてもけうをまつ
つけう　　季方朝臣
あまをまでのそうこそみよんかよぬをとおうる
紙をまでもけう姫上　　右原希信

かつそをれをこもうまでまんれそのまで人あやと
はうつおまでてのおやもけう人くわつれ行を
仏まうよよめう　　連敬法師
はう毋まうとうとをれくまし、うおをうまでも
玉をへうまうて能因法師のとをへうつけう
大江公言
ちのをれのおまでまでハ公をうとふまうて行
年照法師入唐せんとて坂をへまうてを
て七月七日舟にのをる仏
菅大納言公任

在於遠
天河はのはるかなるをへだてゝ
八度一伝をもとめ
伝もる
そのかなたまでこゝろのわたる
中石法師
はるけくもある
よみ人しらず
いえをとをてふみうしなひてし
しぬわの孔を

後拾遺和歌抄第九
羇旅
石山よりかへりけるみちに
をよみ伝ける
逢坂のせきとゆふけとはすれ
十月ゑをみも谷もいまも伝もる
雪のたまるをよみ伝ける
権大納言
行通
秋ごろもたゝ
中納言定頼

雪もていさぎよき心地なんみなめ
雄野のみそれんちまとゆふ
みわまきやなけるをれ
花山院御製
拾遺春のそらのおよのくもかくれ
雄野にまきもろてゆふみそて
懐円法師
おそ秋よのそ風を人とくはこころむ
雄野にまろろみて月をうつそよみ侍もろ
お補

山のとさりのかとこそ見ゆらめ
舟人のうたてなとこそ
よめろ
藤原国行
すきそうおゆおもおよれ
はの国にまきもろみちみて
能因法師
あみやのそのわをよりかれぬいつらゆてんこまをて
阿仏尼
ねのこのみてしてをこのんまをてそ行

はるかなるよさこえやまの山ぞいに
桜は咲きて待ちもまつらむ

よみ人しらず

雪とのみあやまたれつつ散る花は
風のたよりもなくやなるらむ

素性法師

ひとりのみながむる宿の秋の夜は
月すむごとにものぞかなしき

遍昭法師

白雲のよそにのみやは思ひやらむ
我が住む山のふもとなるとは

僧基法師

はるかなるよさこえやまの山ぞいに
桜は咲きて待ちもまつらむ

よみ人しらず

雪とのみあやまたれつつ散る花は
風のたよりもなくやなるらむ

素性法師

ひとりのみながむる宿の秋の夜は
月すむごとにものぞかなしき

遍昭法師

白雲のよそにのみやは思ひやらむ
我が住む山のふもとなるとは

僧基法師

おもひのこすことなき御ことゝ
ぞ
源重之
東路のさやの中山なかなかに
君のちぎりを何にたとへて
みてもまた何もろこしの松のことぞよみ
侍ける
大江匡衡朝臣
東路のそらの秋をもへだてじと
志のみやこをみやこにぞおく
能因法師
おもふ人ありとも告よ白川の関
こえてきくとはいはじ
みえ侍ける
ゆきかへるそらとやきかむ白川の関
春風の吹くにまかせて
大中臣能宣朝臣
東路の浦をはるかにながめつゝ
波ぢまでをもとゞけつるかな
大弐三位

かせもなく住やの子ともみな出そろひて満座団らんありて
書写山にまうでてあひ見し時のことをおもひ出でゝ
あつとよむ月の夜は
月ゆへに袖のなみだをかこつかなわれのみ秋の
満座の物とてもあらねど
月みおろすもの更中宮崇徳院
つゆ仕けき
たゝつれなのやいかなる
中納言資隆
せゝ
絶句
月をへて雲おろそみをあらはせる
宇佐使して返上
月とともに法住寺殿
おくて山のそこひて月新
源為善朝臣
あま坂の関すゑ
右原惟規

四条へまるけうく人

よのつねならぬしの様なりし心ゝえなりしけせう

三月ゝそみ紙はる友原ゐる国ゝちや侍を

なよ所たまはなとそて友枝はゝ申しゝとそ

つまを侍けり 遣る門歌と

約きとみよとめうちをいのをみくうち友ゝみの花

色し 友原ゐる

いのをつくよをけうち友流ゝいまの松こう号やうれ

人のとなきおるまゐもうよ

雅ゐせゝわうまゝてぬ世ゝ 藤原道信朝臣に

入道桜政よかり侍もうこゝあうとすん

かまし侍もうこゝ清興国ゝまうとうんとてた

よたりくそのゝ侍けり

きそのゝたのしもれうん 藤原倫寧朝臣に

色し

つまをのゝ乱もいり約とゐのゝ世ゝをゝきそうゐめ

袖はゝてゝ下ゝて侍もうこゝのうんとてもあるし

入道桜政

なき人のとをとまつらむ

山のとの月ぬみなを思そへよ秋風もこハ吹まさりけり　　源田法師

源頼清朝臣にみちのくにまかりくだりけるに、あふさかの関にてよみ侍りける

あふさかの関のしみづにかげ見えてけふハいくよの人かこすらむ

相模

しらくものよせてハかへすなみの花いくへの松のかげまで

あふ言葉をかけてよみ侍りける

ふきとをす風ハ心にまかせねどたえぬ光ハ人のかすなり

いとりまぜ、のちの人ゆくへなくなりにけるころ

大江為基

射馬ふみてまつりごとおこなひけるころ播磨国の役ゆゑ領国にくだりけるに、国の境にて

播磨潟みちのくまでもこえぬべしこゝろのうちのせきしなければ

中納言定頼

かゝるあだ心をもちて、ものへまかりけるに、義通朝臣十二月のつごもりの日、ものへまかりけるに、

まつことをあとにて暮ぬ年ハ今日ぞ限りとおもひかけきや

まいて錦たちそへてとかりけるをみて

梅則長

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

慶氣法師

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

良勢法師

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

藤原永勝朝臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

藤原國行

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

西之京左大臣

ぬれてほすあまのたもとも見しかひの
浦の波路にかすみ立つなり

ほとゝぎすまつ夜ふけてなくこゑを
きゝ侍るとて

前关内大臣

おもふ人のやどりてそらもかをるなり
おなじ園にやまほとゝぎすきゝ侍るとて

中納言隆房

ほとゝぎすなのりやせましたゝ雨
いまも雲ゐにさみだれの空

伊与国にまかり下りける時、五月十日の比にまかりつきて、
ほどもなくもとの国へ帰りのぼりて、京へ入りけるに、
ほとゝぎすを聞きて

右大弁宰相資業

いそぎつゝあまてる月をながめつゝ
旅寝なれぬる袖の露かな

あるじ侍せとの給せて、舟てゝてこぎ出でゝ、
雨はれてのち、月おもしろくさしのぼりて、
栖の仲秋月

前大納言通俊

雨やみの月うちおこしてみるほどに
まの比田舎おもひやらるゝ

源通親

あるこそかなしき体なれあまをとはのそとなく
山寺よおもひのそ伝ふるに人をとかくもろふた
えぬれなるある　和名抄武蔵
きのふけふとはれそよふるに人かくこそ
こ条院の皇太后宮の女房
月のおくに伝ふるよのある　命婦乳母
なそかく雲かくれゆくそとあるに月さへ
同歌院法皇せさせ給て雪野より葬送
侍まろ一とせとところてるはせまし給し
まつておもひやりてよみ伝もろ
雪のうちのみてもやまれぬみちみちてこもとハ
たえぬ御弟
大納言行成
をくれとつゆのそゆきいそきまさるらんかなしき
七保二年十二月一日皇后宮定子せさせ給て葬
送の夜雪のふりて伝ふれを
一条院御製
野へまてこんひとつをかなしとも我をおくりとハおもはし

八遍茶大政大臣の葬送のあした人くま
をくみて雲のごとくみ侍るを
なきつま宇土をもろもろのたのしみ侍るを
八遍一日文のごとくなむせて葬送のよまの
日そ又の日相模のうたをよみつゝける
小侍従令妹
二月十よりの比まで心ちをこりなやみ侍れ
の日相模のもとよりつゝけてやりける
いまのなきそれけのそらの雲
相模
とまりつるみちをみるにつけてもいとゝ
三條院は皇太后宮の文のごとくおやうち
義人つゝきもろ人のうせ給ひて葬送
の夜よりまて書はてゝつゝけける
山田中務
さる方なきをそなけき侍るあまた秋よあらし
おなじ比その文ゝ侍りけるに人のもとへつゝける
相模

とそやと思ひつるこゝろをきゝ給ひて
　　大和宮こ
うつゝにもうつゝともなくおもやかげを八人のそこ
に後一年たれ時の中宮八月ゝの九日
に来給ひれ時又弘徽殿の中宮九月ゝ廿日
ゝろしたゝの文ゝ伝もう伊勢(ヲヽセ)のあまをまつゝ
りけり
　　東中文出雲
いつそやもきくにうつろふ(うつろ)ものゝ秋のおとを
九兵衛督殿の母君
乃おいのひとりとせもそて師実公のこゝろをて伝
　　小式部
うつゝともなくおもやかげに露けきかな今のそとの空を思ひやる
雲山と経もる人よおもひやれ
方まもるとては十とゝ日はあまてゝ
まそて伝て
　　能因法師
ゆるもとゝもる人をるゝ
石兵衛督佐実ゝ
ゝひつゝりける
　　左大弁小方
いそやをもつゝりかゝんとみもすそ宿れ秋のゆふ
たやみく時て山寺ゝ伝ける人のもとゝつゝり

きう　　よみ人しらず

山里はふゆそさひしさまさりけるひとめもくさもかれぬと思へは

春弁のたやすらひをきゝて

そとはめていとおそしとやきつ鳥

よみ侍けり　　前大納言隆国

おもふらむ人のこゝろもしらでたゞなかきよをなけきつゝのみ

小弁

うきものとたゞ何となく思ふにも袖のみぬるゝ秋の夜哉

中宮門侍

行末と今くるそ中よもきん花ちる里も

住所え捕のをそもとはゞ

をそくまきたるよし

とてよめる

源順

よしのやま花のけふりと峰こえて

板則もちてかへるきぬ

つゝみをも

思ひいつや花をもよめる

後冷泉院御時

てうけう花ともかきて

のとハせ紗つるゆきまよてよろけさ

[illegible]

戒邪令奴

[illegible]

後三条院位よつせ紗てのころ六月雨ひまなく
七日七夜して六月百文かりて雨のふ
仍れてそ帝もみれまゐとおひそまや
仍まそよめる

六月雨にあるねけさまそれせぬ袖もぬれてやそふん

二条后のさらに仕へ侍りけるころ
みそそみてよみ仍まる中納言定頼母

あまかくれて見しよるみそうつゝ哉夢なるよをそれて仍まる

たれおもふ雨の夕ぐれみすあぬやそのとちとも
ちとり月まてもしまるいんよみ仍まる

藤原相如女

此ころとるけまて人を松まるくつゝ夜ねぬ也てき
ちみ相如と栗田右大弁まかて後のなて
又ねまてとまるてねぬ夜をいかゝ

通信教授をうけ
きるこかの人方面の
又おもいの人々それ
八月のはをひもとき秋の
雪み寺を仏きろ日よみ待ける
つれなくみ月雨みそうる
四会よ仏きろかとよ
それいろまのうを
ふたりの父はいそのみ
数通収をとそれ
そそよみ仏きろ
ふたりの父はいそのみ
数通収をとそれ
ふたりの父はいそのみ
数通収をとそれ
ふたりの父はいそのみ
数通収をとそれ

次順にをくれ侍てその日の
まるふ　　伊勢大補

つくしそうみ昔そのをいまそくれ今そ新き
とし比をみ侍まるめーをくれて又のとしを
てみをきはてうはをまるよめろ

年をてて侍る今日つくしそうみけまう有書
也し　　法眼元補

つくしまじんをそそるる川巴ひるれそのけをい
後一条院御時皇太后宮せを紗て

そその日ますりまの事ありまわ
くれそこのまよ時ありまてまいりまわ
ことひをこせて侍けるよめろ

江侍従

つる身をれまのつませおこそとと思ふ
ちの服ぬ侍けるよめろ

平棟仲

巴かねるみまめ是ほみ元よ人をつくれぬる
うすくふくれ父の侍ける後のてる神元

平教成

十くねり侍もろよよめる

うすもろ乃尓之よこつる在尓そてそつそうまよつつ
十月そもとしもの（まいわ侍もけっ遠て一條院
をすくとて車をむまつまてて之侍乃礼を
ひたき侍もろとみ侍もろをんてよめる

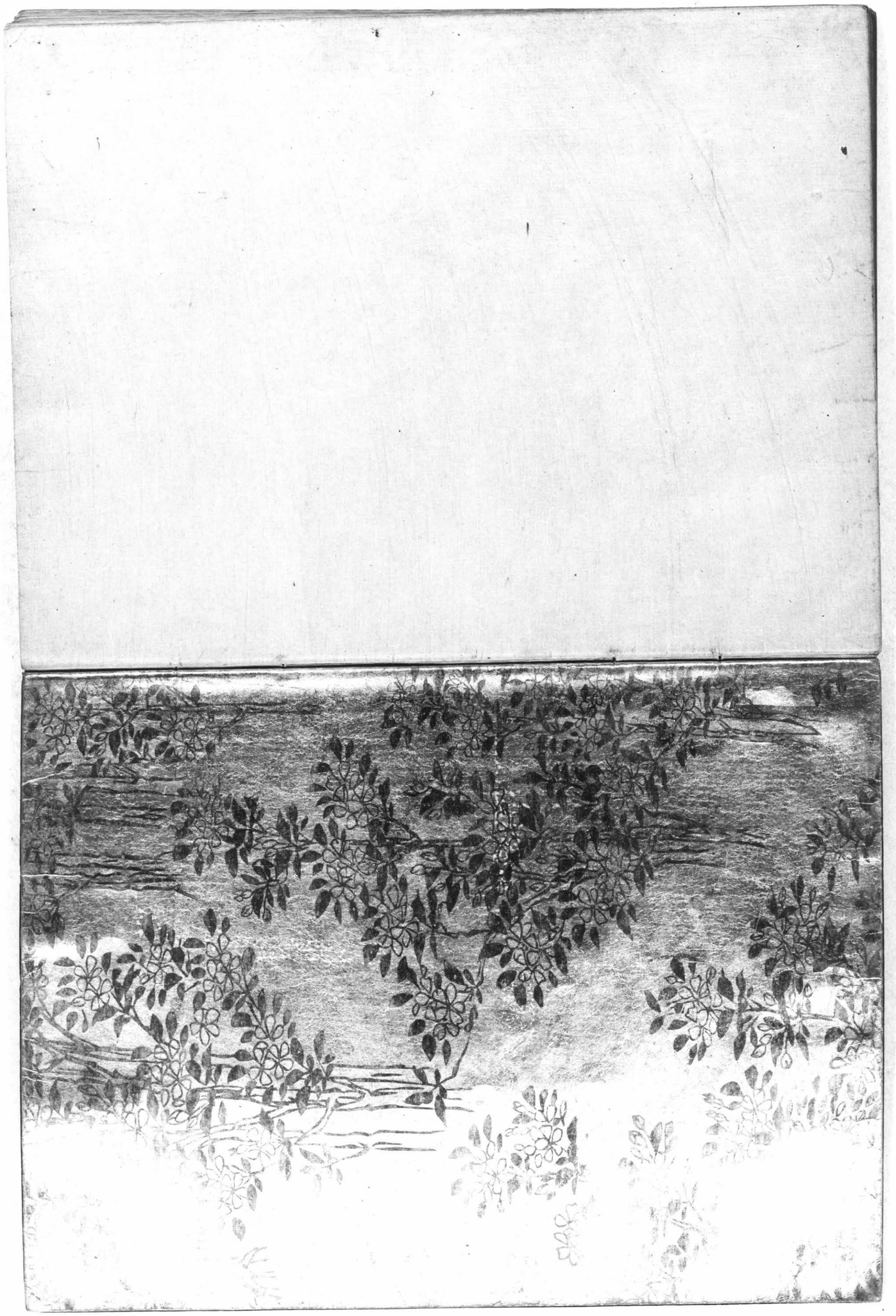
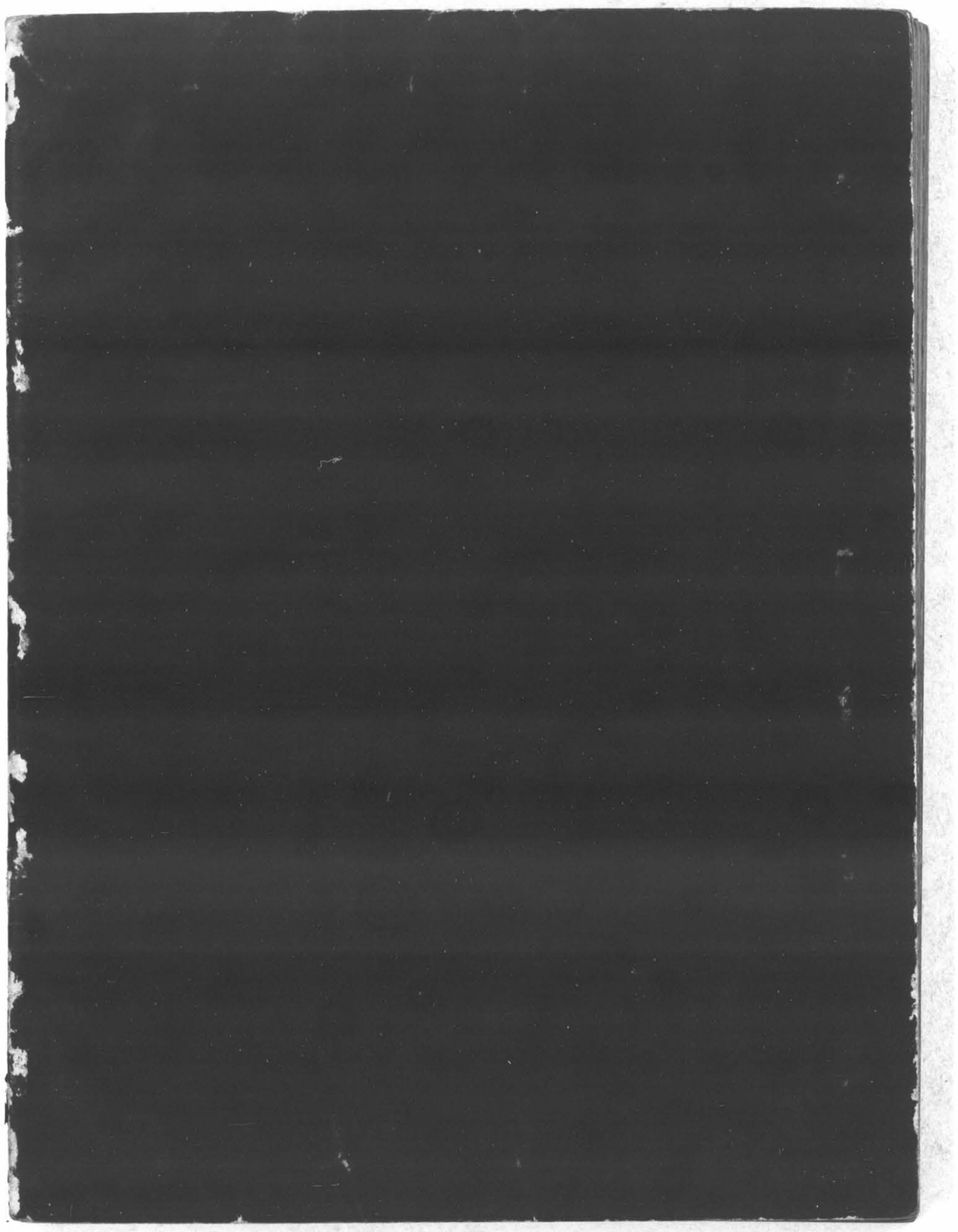
赤染衛門

清よきよ浦左みくまの之とてけ守とろて一之
吉野山後一条院の御就をくりしろ
をんてみろれけっまつと思ひそてよみ

侍もろ

いろみてそつてとやまん寺をおそおろ乃月みえを
遠御よをそれて後乃心まいを侍もろ
遠ふおろそーまるのいろうあれて侍もろを
と色てそれをねやとをれてあるとせよく
出て侍ろおとをひそれてよめる

赤染衛門

乙よをこうあれ幻とハ歎つれあるす宿父と有ろ
雄野よ浦当侍もろ小一條院のかよ
おもろるよハとて上おそそまろてむろを思

九州大學圖書印